

【翻 訳】

フランツ・カフカ

『ブルームフェルト ある中年独身男』(1915年)

山 中 博 心

ある日の夕べ、中年の独身男ブルームフェルトは、部屋への階段を上ってきた。骨の折れることだ。彼は7階に住んでいたからである。上ってくる間に考えた。最近なんとしばしばこの完全に孤独な人生が重荷であるか、と。今この7階までこそっと上って来なければならないこと、誰もいない部屋に入るのに人目につかないようにすること。ナイトガウンに着替え、パイプにタバコを詰め、何年か前から購読しているフランスの新聞に目を通し、自分で用意したサクランボ酒をちびりちびりやり、30分程して最後にベットに入る。予め寝具を整えなおさなければならない、教えても駄目な手伝い女がいつも気分をまかせてぞんざいに投げ出しているからである。誰か同伴者、こうした行為を見ていてくれる者がいれば大変歓迎されるのだが。これまでにあれこれ考えた、小さな犬を飼ってはどうか。そんな犬ならば陽気で、人間に感謝し忠実である。ブルームフェルトの同僚の中には犬を飼っている者がいて、飼い主以外の者にはくっついて行かないし、ちょっとの間見ないと大きな声で吠えながらすぐに出迎えにきてくれる。御主人様、自分を大事にしてくれる人に再会できた嬉しさを表現するかのよう。に。勿論犬にもマイナス点はある。どれだけ清潔にしておいても部屋を汚す。それはまったく避けられない。家に入れる前にいつも洗う訳にもいかず。そのことはまた犬の健康を損ねることにもなる。しかし部屋の中が清潔でないことは今度はブルームフェルトのほうが耐えられない。部屋が清潔であることは彼にとって不可欠である。この点で1週間に何度となく、そのことをあまり不快に思わないお手伝いとやりあうことになる。彼女は耳が遠いので、通常清潔さという点で文句を付けたいところに手を引いて連れて行くことになる。このような厳格さによって部屋の中の秩序は彼の望み通りに保たれている。犬を部屋に入れたらこれまで注意深く回避してきた汚れを自分から部屋に招き入れることになるだろう。犬にはつきもののノミもやってくる。しかし一度ノミが出たら、その部屋は犬に任せて別の部屋を探す日もそう遠くはないであろう。しかし清潔でないことは犬の欠点の一つに過ぎない。犬は病気にもなる。しかし犬の病気のことなど誰も解ってはくれない。病気になればこの動物は隅っこにしゃがみ込んだり、足を引きずってうろうろ

したり、クンクン嗅いだり、咳をしたり、何かの痛みで吐いたりする。そうすると毛布にくるんだり、おいでおいでと口笛を吹いてやったり、ミルクを置いてやったりするが、そんな世話をするのもそうしたことが一時的な苦しみであるという望みがあるからである。しかし深刻で不快な伝染病であることもある。元気であってもいずれは年をとり、この忠実な動物を頃合いを見計らって手放す決心ができないと、犬は涙を浮かべた老いた目で飼い主を見る時が来る。そうすると目も半分見えず、肺も弱って脂肪のため動きの鈍くなった動物に苦しめられ、犬が与えてくれる喜びに対して高い支払をしなければならなくなる。それならばどれほど犬が欲しくても、今から30年ひとりで階段を上ろうと思う。あとあとそのような年老いた犬に煩わされるかわりに。そんな時には犬は彼自身より大きく溜め息をつきながら階段を一段一段上ってくるだろう。

而してブルームフェルトはひとりであることになる。何か自分の下僕となるような生き物を飼いたいと思う年配の独身女性の趣味は持ち合わせていない。彼女が守ってやったり、優しくしてやったり、彼女に仕えようとする生き物。その結果その目的のために猫、カナリア、それとも金魚でさえも満足してしまう。それができない時には窓辺に花を置くことで満足できる。それに反してブルームフェルトは同伴者が欲しいだけである。世話をやく必要のない動物、時には踏んづけても大丈夫なもの、必要な時には道端で夜を過ごすこともでき、もしブルームフェルトがそれを望むならすぐに吠えたり、飛びついたり手をなめたりして思いどおりにしてくれる動物。何かそんなものをブルームフェルトは欲している。しかし大きなマイナスなしで持つことができないと解ったので諦めたが、それでも彼の基本的な性格からして時々、例えば今日の夕べのようにまたしても同じようなことを考えてしまうのである。

7階の自分の部屋のドアの前でポケットから鍵を取り出そうとした時、部屋の中の物音が彼の耳に入ってきた。独特のカチカチという音、とても元気がよくてしかも規則正しい音、ブルームフェルトは丁度犬のことを考えていたので、犬の前足がたてる音、前足が交互に床をうつ音。しかし前足はカタカタ音を立てない、それは前

足の音ではない。急いでドアを開け灯りをつけた。こんな光景を予想だにしていなかった。なんと不思議なことから、二つの小さな青い縞模様のセルロイドのボールが飛び跳ねている。寄せ木の床で上へ下へと。一つが床の上を叩くともうひとつは空中に浮かんでおり、疲れを知らずその遊びを繰り返している。嘗てギムナージウム時代に良く知られた電気実験で小さなボールが似たような飛び跳ね方をしているのを見たことがある。しかしここにあるのは比較的大きなボールであり、がらんとした部屋の中で飛び跳ねているのであり、電気実験が行なわれているのではない。ブルームフェルトはボールの方にかがみ込んでよく見てみた。疑いも無く普通のボールで多分その中には幾つもの小さなボールが入っていてそれがカタカタいう音をたてているのであろう。ブルームフェルトは空中に手を伸ばしてそれらのボールに紐が掛けられているかどうか確かめようとした。否。それらは独りで動いている。残念ながらブルームフェルトは小さな子どもではない、そうであったら2つのそのようなボールは喜ばしき贈り物であろう。他方全体的にはもっと不快な印象を彼に与えていた。他人から注目されない独身者として人知れず生きることも意味のないことではない。今誰でもかまわぬが、この秘密を嗅ぎ付けて彼にこの2つのボールを送って寄越したのだ。

彼が一つを捕まえようとする、2つとも身をかわして、後ろについて部屋にくるようにと誘う。ブルームフェルトは思った、「ボールの後ろからついて走るのは馬鹿げている」。といて、立ったまましていると、追跡を諦めたように思われ二つのボールは同じ箇所止まってしまう。「でも捕まえてやろう」と再び思い直してボールの方に急いだ。即座に彼らは逃げたが、ブルームフェルトは次から次に足を繰り返出し部屋の隅に追い込み、そこにあった旅行鞆でボールの一つを捕まえるのに成功した。それは小さくて冷たいボールであり明らかに逃げることに熱心で、彼の手の中で身をよじっている。もうひとつのボールもまるで同僚の苦境を目にしたかのように、前よりも高く飛び上がり、ブルームフェルトの手に届くぐらいに跳躍の幅を広げて行く。この手に体を打ちつけて、どんどんスピードを増して打ち付けるような跳躍になり、攻撃目標を変えもうひとつのボールを完全に捕まえている彼の手に対してどうすることもできなかった。もっと高く飛び上がり、多分ブルームフェルトの顔に届かんばかりであった。ブルームフェルトはこれらのボールをも捕まえることは可能であり、二つをどこかに閉じ込めておくこともできた。しかし今のところ彼には自分の尊厳が傷つくように思えた。二つのボールに対してそんな対処の仕方をすれば。しかし二つのボールを自分のものにするのは楽しみでもある。すぐにボールは疲れ果て、タンスの下に転がり込み、休息を取るであろう。こんなことをあれこれ考えているにも拘らず、ブ

ルームフェルトはある種の怒りを覚えて、ボールを床に投げつけた。このとき薄くて弱い殆ど透き通っているセルロイドのボールが壊れなかったのは不思議である。脈略なく二つのボールは前と同じように低くて互いに調子を合わせて飛び跳ね出した。

ブルームフェルトは落ち着いて服を脱ぎ、タンスの中へしまったが、お手伝いがちゃんと整理しているかどうか常々じっくり調べてみる習慣があった。1、2度肩越しに向こうのボールの方に目をやった。二つのボールが追っかけないので、むしろブルームフェルトが追っかけているように見える。ボールは追いかけられずそれどころか彼に従っているように見え、彼のすぐ後ろにくっついて彼の背中すれすれでジャンプしている。ブルームフェルトは寝間着を着て、棚に掛かっているパイプを1本取り、向側の壁のところに行こうとした。向きを変える前に思わず一方の足で後ろへ蹴り上げた。しかしボールは逃げる術を心得ており一撃を食らわされることはなかった。今彼がパイプにかかり切りであるが、ボールはまたしても彼の後ろにくっついていて。彼はスリッパを引きづりながら不規則な足取りで進み、足を上げる度に休み無くボールと衝突した。ボールは彼と歩調を合わせる。不意にブルームフェルトが向きを変えて、どのような動きをしているのかを見ようとした。しかし彼が向きを変えるやいなや、ボールは半円を描いてすぐに彼の後ろに廻ってしまう。彼が向きを変える度にこれが繰り返される。仕える同伴者のようにボールはブルームフェルトの前に立ち止まることを避けようとする。これまでは敢えてそうやっているのは自分たちのことを知ってもらうためのように思えた。今は既に自分達の職務についていた。

これまでブルームフェルトはいつも、自分の力が事態を納めるのに十分ではないような例外的な場合には、そのことに気づいていないような振りを緊急手段として採ってきた。しばしばそれが功を奏し、少なくとも事態を良くすることができた。今も同じような態度でパイプ棚の前に立ち唇を尖らせてパイプを選び、用意されたタバコ袋から目一杯パイプに詰め、気にもかけずに自分の後ろでボールに飛び上がらせていた。ただテーブルの方に行くことは躊躇った。ボールが飛び上がるのと自分の歩調が合うのは苦痛であった。それで立ったままパイプに詰めるのに不必要に時間をかけ、テーブルとの距離を測っていた。ついにはその弱点を克服し、その距離で床を踏みつけるように進んだのでボールの音は耳に入ってこなかった。彼が座っていると、勿論ボールたちが肘掛け椅子の後ろでまたしても前と同じように飛び跳ねる音が聞こえる。

テーブルの上の壁には手の届くところに板が取り付けられており、その上にサクラソウのビンが小さなガラス戸の中に立っていた。そのビンの横にフランスの雑誌

が何冊も山積みになっていた。しかし必要としているものすべてを降ろす代わりにブルームフェルトは静かに坐って火の付いていないパイプの先を見つめていた。彼は待ち受けていた。突然まったく予期することなく彼の体の強張りがとけ、一気に肘掛け椅子ごと向きを変えた。しかしボールもまたそれに応じて目覚めるか、もしくは彼らを支配する法則に何の考えもなく従った。ブルームフェルトが向きを変えるのと同時に、ボールも場所を変え、彼の後ろに身を隠した。今ブルームフェルトはテーブルを背にして坐っている、火のついていないパイプを手にして。ボールの方はテーブルの下で飛び跳ねている。絨毯が敷いてあるのではほとんど音はしない。それは大きなプラスである。ただ弱くて鈍い音だけではするが、音をきいてボールを捕まえるにはとても注意深くあらねばならない。ブルームフェルトは勿論非常に注意深く二つのボールに耳を傾けていた。しかしそれは今だけのことで、暫くすると多分彼はボールにはまったく耳を傾けないであろう。ボールが絨毯の上で彼の注意をひくことができないのはボールの大きな弱点のように思える。ボールには一枚、もっと良いのは二枚絨毯を敷いてやることで、ボールは殆ど威力を無くしてしまう。勿論それは特定の時間のことであって、それ以外ではボールの存在はある種の力となっている。

今だったらブルームフェルトは犬を上手く使えたかも知れない。若くて元気な動物ならそのボールを始末してくれたかも知れない。彼は思い描いてみた、この犬が前足でボールに掴み掛かる様を、その場からボールを追い払う様を、すぐにでもブルームフェルトは犬を調達することは簡単なことである。しかしさしずめボールはブルームフェルトだけを畏れれば良いのであり、彼の方もボールを壊してしまおうという気はない。ひょっとしたら彼にはそうした決断力が欠けているのかも知れない。夕方疲れて仕事から帰ってきて、安息が必要な時に予期せぬ出来事が彼には用意されていた。何て自分は疲れているのだと、今初めて感じた。そう、確かに彼は近いうちにボールを壊してしまうであろう、しかし目下のところはそうはしない、あっても多分次の日になってからであろう。全体を先入観なしに見てみると、そもそもボールは十分控えめな態度である。例えばボールは時々前に飛び上がるかも知れないし、姿を見せてはまた自分たちの場所に戻って行く。あるいはもっと高く飛び上がることがあっても、テーブルの板を打ちつけても絨毯で緩和されて傷を負わないこともある。しかし、ボールたちはそんなことはしない、ブルームフェルトを不必要に刺激するつもりはない。明らかにどうしても必要なことに限っている。

勿論、ブルームフェルトをテーブルのところに居づらくさせるのに、必要不可欠なことだけで十分ある。彼は数分間だけそこに居てすぐに眠りに行こうと思ってい

た。そうした動きをする理由の一つがそこではタバコが吸えないことである。何故ならマッチをナイトテーブルの上に置いてきてしまったからである。つまりマッチを取りに行かねばならないのである。しかし一度ナイトテーブルのところに行けば、そこにじっとして、横になる方が良い。このことにはもうひとつ裏の考えがあった。つまり彼は思った、ボールが盲滅法ブルームフェルトの後ろに付こうとしてベットの上に飛び上がり、そこへ彼が身を横たえたら、意図したかは別にして、ボールを押しつぶしてしまうかも知れない。それでもボールの破片が飛び跳ねるかも知れないという考えを彼は払いのける。異常なことにも限度があるはずだ、たとえ絶えずということでもなくとも、ボールの破片がそれに反して飛び上がることがあったにしても、ボール全体は決して飛び跳ねないし、ここでも飛び跳ねないであろう。

「立て！」と、こんな風に熟慮することで勇気が湧き、声を張り上げて、自分の後ろにボールを従えて床を踏みならすような足取りでベットへ向かった。自分の望みが確認されたように思えた。彼が意図的にベットのそばに立ったとき、すぐにボールの一つがベットの上に飛び上がった。それに反して予期せぬことが起こった。もうひとつのボールがベットの下に潜り込んだのである。ボールがベットの下でも飛び跳ねる可能性についてはブルームフェルトはまったく考えていなかった。それが如何に不当なことであるかを感じていたにも拘らず、彼はこの一つのボールに憤慨した。何故ならベットの下で飛び跳ねることによってボールはベットの上に居るボールよりも自分の役目を果たしているのかも知れないからである。今大事なことはボールがどっちの場所に決めるかであった。というのもボールが長い間別々に仕事ができるとはブルームフェルトは思えないからである。実際次の瞬間下のボールがベットの上に飛び上がったのである。

「よし、捕まえるぞ」とブルームフェルトは嬉しさの余り熱くなって、体から寝間着をはぎ取り、ベットに身を投げた。しかしその同じボールが再びベットの下に飛び降りたのである。ひどくがっかりしてブルームフェルトは崩れ落ちた。そのボールは多分ベットの上でぐるっと見回してそこが気に入らなかったのである。そのボールにもうひとつのボールが従い、当然ベットの下に留まることになった。何故ならベットの下の方が良いからである。「さて、俺は一晩中、これらの喧しいドラマーをここに置いてやるか」と考えたブルームフェルトは唇を噛んで、頭を振った。

どのような手を使ってこの夜ボールが攻撃してくるのか解らないまま、悲しい気分になっていた。彼の眠りは素晴らしかった。小さな騒音なら彼は簡単に克服するであろう。そのことを確実にするためにこれまでの経験に即して2枚の絨毯をボールの下に敷いた。それはまるで小さな犬を飼っていて、優しく寝かしつけるようであっ

た。ボールも疲れて眠たくなったようにその跳躍は前よりは低く、ゆっくりしたものである。ブルームフェルトがベットの前に膝まづきナイトランプで照らしたとき、時にはこのボールは絨毯の上で永久に動かないのではと思える。それほどボールは弱々しく落ち、少しの距離をゆっくり転がる。勿論それから再び役目に合わせて身を起こす。しかし朝早くベットの下の覗き込むと、ブルームフェルトが静かで無害な子供用の二つのボールを見つけることは容易に起こりうることである。

しかし跳躍が決して朝まで続くとは思われない。何故ならブルームフェルトがベットに横になっているとき、跳躍の音を耳にすることは最早ない。何かを聞こうと努める。ベットから身を乗り出して聞き耳を立てるが物音一つしない。それほどに絨毯の効果は大である。ボールは最早飛び跳ねてはいない。そのことの説明としては、絨毯が柔らかくて飛び上がれないか、これの方がよりよいことだがこれ以上飛び上がるつもりがないかのどちらかである。ブルームフェルトは一体事態がどうなっているのかを起き上がれば確認できるのだが、しかしやっとな静かになったことに満足してむしろ横になったままでいたい。視線を向けることで静かになったボールに触れるようなことはしたくない。それどころかタバコを吸うのも諦め、横を向いてすぐに眠ってしまった。

しかし彼は心を乱されなかった訳ではない。いつものように彼の眠りは今回も夢を見ることはなかった。しかし非常に穏やかであった訳ではない。あたかも誰かがドアを叩いているかのような錯覚で夜のうちに何度となくビクッとさせられた。誰もノックなどしていないことはきっと彼にも解っている。一体誰が夜にノックするだろうか、孤独な独身男のドアを。しかし解っているにも拘らず、何度となく跳ね起きて一瞬ドアの方に目をこらす。口を開けて、目をカッと見開いて髪の毛は汗ばんだ額の上で震えている。何回起こされたか数えてみようと思う。しかし数え上げる数字のとんでもない多さに分別をなくし、またしても眠りに落ちた。

ノックの音がどこからするのか解るような気がする。ドアのところではなくどこか別のところ。しかし彼は眠りに捉えられていて自分の推測が何に基づくものかははっきりしない。強くて音の大きなノックとその前の小さくて不快な多くの音が寄り集まったものであることは彼にも解る。しかしこのノックを避けることができれば小さな不快な音には全て耐えようと思う。遅過ぎることの理由は定かでないがある。彼はここには介入できない、怠ってしまったのだ、彼には言葉がない、ただ黙って欠伸をする時に口が開く、そのことを腹立たしく思い、枕に顔を埋める。そんな風に夜が過ぎて行く。

朝、お手伝いのノックで起こされる、救われた、と溜め息をつきこの優しいノックを快く迎え入れる。いつもはノックの音が聞こえないといって文句を言っていたの

に。「お入り」と大きな声で言うとしたが、その特別の元気のよい、確かに弱々しくはあるが文字通り挑発的なノックの音が耳に入ってきた。それはベットの下のボールたちである。目を覚ましたとすればブルームフェルトとは反対に夜中に新しい力を蓄えたのか。「すぐに」とお手伝いに言って、ベットから飛び起きた。しかしボールを背負っているように、慎重に背中をいつも彼らの方に向けて床に身を投げ出す。首を振ってボールを見つめる——殆ど呪いたい程である。夜に邪魔になる毛布をはね除けるようにボールは多分一晩中続く痙攣のためにベットの下で絨毯をひどく移動させてしまったので、自分たちの体の下には何も敷いていない木張りの床しかなく、騒音を立てることができたのだ。「絨毯の上へ戻れ」と怒った顔でブルームフェルトは言った。絨毯のお陰でボールが再び静かになってからようやくお手伝いを部屋の中に呼び入れた。この脂肪のついた鈍くて、いつもごちない歩き方をする女が朝食をテーブルにセットし必要な世話を2つ、3つしている間、ブルームフェルトは寝間着のまま下に居るボールが動かないように、不動の姿勢でベットのそばに立っている。お手伝いがこのことに気付いているかどうかを確かめるために、目で彼女を追った。彼女は耳が遠いのでそんなことはありそうもない。ブルームフェルトはそのことを良く眠れなくて神経過敏になっているためだと思った。手伝いが時々立ち止まって家具に掴まって、眉毛を吊り上げて聞き耳を立てるような時には、手伝いの仕事を少しばかり急がせることができたラッキーだろうに。しかし彼女は何時もより仕事がゆっくりしていた。彼女は馬鹿丁寧なブルームフェルトの服と長靴を抱えて荷物と一緒に廊下に出て、長いこと向こうに行つたままであり、向こうからは単調で途切れ途切れに何かを叩く音が聞こえてくる。外で彼女が服を叩く音である。その間ずっとブルームフェルトはベットの上でじっと耐えていなければならず、動くことも許されず、ボールを自分の後ろに引っぱろうとしない時は身動きできなかった。できるだけ熱いままで飲みたいコーヒーを冷ましてしまうことになる。降ろされた窓のカーテンをじっと見つめることしかできなかった。カーテンの向こうにはどんよりと陽が白んできていた。やっとなことでお手伝いが仕事を終えて、いい朝をと言って出て行こうとした。しかし彼女が完全に行ってしまう前に、ドアのところに立ち止まりほんの少し唇を動かして、ブルームフェルトの方に視線を向けた。ブルームフェルトが彼女に釈明を求めようとしたとき彼女は出て行ってしまった。ブルームフェルトが一番したいことはドアをぱっと開け放ち、何という愚かで年取った鈍い女かと叫んでやることであった。しかし彼女に対してどのように対応すべきかを考え巡らすと、彼女は疑いもなく何にも気付いていないが、しかし何かに気付いたような素振りをしているのだという馬鹿げたことしか考え

つかない。なんと彼の思考は混乱していることか！　そしてこれは単に良く眠れなかった夜の所為だ！　眠りが悪かったことのちょっとした説明は次のようにつけられる。昨夜はいつもとは違い、タバコを吸わず火酒も呑まなかったからである。これが彼の考えた末の結論なのだが、「煙草を吸わず、酒を呑まなければ眠りは悪い。」

今からは彼ももっと自分の健康に気をつけるであろう。手始めにナイトテーブルの上に掛けてある家庭用の薬箱から綿を取り出して、丸めたものを二つ耳に詰めた。それから立ち上がり試みに歩いてみた。ボールは後から附いてきたがその音は殆ど耳に入って来ない。もっと綿を詰めればまったく聞こえないであろう。ブルームフェルトはさらに2、3歩進んだ。特別不快なものはなかった。各自おのが世界である、ブルームフェルトもボールも。ボールは互いに結び合わされているが邪魔し合うことはない。ただ一度ブルームフェルトがさっと向きを変えたときも、一つのボールが反対方向に速やかに動けなくてブルームフェルトの膝がそのボールに当たった。それが唯一思いがけない出来事であり、それ以外ブルームフェルトは落ち着いてコーヒーを飲み、まるで夜眠れなかったからではなく、長い道のりを歩いてきたように腹が空き、冷たくて並外れて新鮮な水で体を拭い、服を着た。これまでカーテンを開けたことはなく、むしろ用心から半ば暗いところでじっとしていたのである。彼はボールのために他人の目を必要としなかった。しかし今彼が出かける準備をしているとボールが小径にまで彼の後を附いてくるようなことがある場合のために——そうは思わないが——それなりに備えがいる。そのために思いついたことがある。彼は大きな衣装ダンスを開け、背中をタンスに向けて立った。ボールはそのことで何か企まれていると感じているかのように、タンスの前で内側に対して身構え、ブルームフェルトとタンスの間どの場所も利用し尽くして、他にやりようがないならば、ちょっとタンスの中に飛ぶ込んで、すぐに又中の暗がりから逃げ出してしまい、それ以上中に入ることはない、それよりは自分の職務を怠って殆どブルームフェルトのそばにくっ付いている。しかしボールのちょっとした策略は何の役にも立たなかった。それでブルームフェルトは後ろ向きでタンスの中に入った。勿論ボールは彼に付き従わねばならない。しかしそれによってボールに対して決断がなされた。というのも衣装ケースの中の床には長靴、箱、小さな旅行鞆などの色々な小物があり、それらは全て整理されているが——今ではそれがブルームフェルトには残念なのだが——しかしボールが入るのに邪魔になっている。その間ケースの扉を殆ど閉めていたブルームフェルトがもう何年もやったことのないように大きく飛び上がってケースから外に出てドアを閉めた。「うまく行った」と思いブルームフェルトは顔の汗を拭った。なんとボールのやつケースの中で騒いでいる

わ。まるで絶望しているかのような印象をボールは与えた。そのことにブルームフェルトはとても満足であった。彼は部屋を後にし、佯しそうな廊下が彼には快適に思われた。彼は詰めていた綿を耳から取り、目覚めかけた建物のいろんな騒音にウツトリとしていた。まだ人の姿が殆ど見られないほど、とても朝早かった。

お手伝いのいる地下の部屋へ通じるドアの前の廊下に彼女の小さな10歳の息子が立っている。母親そっくりで、年寄りの醜さがこの子にも認められた。がに股でズボンのポケットに手を突っ込んで立っていた。この年にして既に甲状腺を患っており、息を継ぐのも大変で唸るような呼吸をしていた。しかしいつものブルームフェルトならこの男の子が通路に出てくる時、できるだけこの光景を見なくて済むように急ぎ足ですり抜けるのであるが、今日はこの子のそばにしっかりと足を止めていたい気分である。男の子もこの女によってこの世に生み出され、その出自の全ての特徴を備えているが、それでも目下のところ子供には違いなく、この不格好な頭の中に幼い考えが詰まっている。彼に解るように話しかける時には多分明るい声で無垢で恭しく答えるであろう。そしたら気持ちを抑えて頭を撫でてやれるだろう。そんなことを考えているうちに、通り過ぎて行った。小径に出て解ったのだが部屋の中で思っていたより天気は穏やかであった。朝の霧があちこち垂れ込めていて強い風に吹かれて箒で掃かれたような空の青い部分が姿を現した。いつもより部屋を早く出られたことに対してボールに感謝した。それどころか新聞を読まずにテーブルの上に置き忘れてきた。何れにしても時間ができてゆっくりと会社に行ける。ボールから自由になるとボールが殆ど気になっていないことが奇妙に思われた。自分の後ろに附いてきている限り、他人は彼の持ち物と見なすであろうし、彼の人物評価においても引き合いに出される違いはない。しかし今は衣装ケースの中でボールは単なる玩具に過ぎない。ボールを本来の定めに導くことでひょっとしたら一番無害な物にすることができるのではという思いがブルームフェルトの頭の中を過った。あそこの廊下に今もなお男の子は立っている。ブルームフェルトは彼にボールを呉れてやる、こっそりとではなく皆に解るようにプレゼントしてやる。それはきっとボールを潰してしまえという命令と同じ意味である。仮にボールが無傷であっても、少年の手の中にある方がタンスの中あるよりは意味をもたないであろう。建物中の人がその少年がボールで遊んでいる姿を見るであろうし、他の子どもたちも仲間になっていると、これは玩具のボールであってブルームフェルトの人生の同伴者ではない、という皆の思いは揺るぎなくまた抗いがたいものとなるであろう。ブルームフェルトは走って部屋に戻ってきた。丁度少年が地下への階段を下りて行き、下のドアを開けようとしているところだった。彼は少年に声をかけ、彼の名前をはっ

きり言わねばならない。その名前はその少年と関係するものの全てがそうであるように滑稽である。だが彼は「アルフレット、アルフレット」と声をかけた。その少年は長いこと躊躇っていた。「さあおいで、君にあげるものがある」、とブルームフェルトは言った。管理人の二人の幼い娘が向うのドアから出てきて、興味深そうにブルームフェルトの両脇に立った。男の子よりずっと解りが速く、何故男の子がすぐに来ないのか訝っていた。彼に娘たちは目配せをし、その際もブルームフェルトを視野から外すことなく、しかしどんな贈り物を男の子が期待しているのか明かにできないでいる。好奇心に二人は苦しめられ、足を交互に上げ下げしていた。ブルームフェルトは彼女たちも男の子も変だと笑った。男の子はやっと事情が飲み込めたようで階段をぎこちない鈍重な足取りで上ってきた。ところで下の地下室のドアのところに姿を現す母親、男の子はその歩き方で自分の母親であることを証していた。ブルームフェルトがとても大きな声を出したのは、お手伝いにも自分のことを解らせ、それが必要な場合には息子の任務の遂行を監視させるためである。ブルームフェルトは言った。「上の私の部屋にきれいなボールがある。君欲しいかい。」男の子はただ口を歪めるだけで、どのように振る舞えば良いのか解からず、体の向きを変え尋ねるように下にいる母親を見た。しかし女の子たちはすぐにブルームフェルトの周りで飛び跳ね始め、彼にボールをねだった。ブルームフェルトは彼女たちに「君たちもボールで遊んで良いよ」と言ったが、しかし男の子の返事を待っていた。彼はすぐにボールを女の子達にやってしまうかも知れない。しかし彼女達はブルームフェルトには余りにも軽率そうに思えたので、今はそれ以上の信頼を男の子に寄せていた。その間男の子は言葉を交わすことなく、母親のところに助言を貰いに行き、ブルームフェルトの新たな質問を肯定するように頷いた。「じゃあ気をつけて」と言うブルームフェルトはそのプレゼントに対して感謝の言葉は返って来ないと見越しており、「私の部屋の鍵は君のお母さんが持っているから、お母さんから借りなさい、これは私のタンスの鍵だから、その中にボールが入っているから。タンスを閉めて気をつけて部屋の鍵をしてね。でもボールは君の好きなようにしていいから。ボールを戻しておく必要もないから。解った？」残念ながら男の子は理解していなかった。ブルームフェルトはこの何処までももの解りの悪い餓鬼にすべてをはっきりさせようと思ったが、しかし正にこうした意図のために同じことを何度も繰り返してしまい、部屋とタンスに鍵をかけることを交互に何度も話すことになった。それでも男の子は目を据えて見ているが、恩人に対するというよりは誘惑者に対するようである。勿論女の子達はすぐにすべてを理解して、ブルームフェルトの方に押し寄せてきて鍵に手を伸ばした。「待ちなさい」と言って、ブルームフェ

ルトは皆に対して怒りを顕にした。時間も経っていて彼もこれ以上ゆっくりしていられなかった。お手伝いが解りました、男の子にはちゃんと言って聞かせますといい加減言ってくれたら。そんなことはせずに彼女は相変わらず下のドアのところに立ったまま、内気で耳の遠い女のように気取って微笑み、ひょっとしたら上で自分の息子にウツトリしたブルームフェルトが九九でも言わせているかと思っているかも知れない。だがブルームフェルトにはもう一度地下室への階段を下りて行って、頼むから自分をボールから解放してくてるように、あんたの息子にいつてくれと耳元で大きな声で言うことはできない。タンスの鍵を一日中この家族に預けておくだけでも彼は十分無理をしていた。自分で男の子を上に乗せて行きボールを手渡す代わりに、鍵をその子に渡すのは自分可愛さのためではない。上でボールをまずやってしまい、予めそうなるに決まっているが、そのすぐ後にまた男の子から取り上げれば自分の後ろに連れて歩くことになる。新たに説明を始め、それを男の子の虚ろな目を見てすぐに中断してしまった後、「言っていることが解らないのか」と殆ど悲しくなる思いで尋ねた。そんな虚ろな目は人を無防備にさせてしまう。言いたいこと以上のことを言わせてしまう虚ろな目、ただこの空虚さを理性で満たそうとすればだが。

その時女の子達は大きな声で言った。「あの子にボールを取ってきてあげる。」彼女達は抜け目なく、自分たちには男の子を介してしかボールが手に入らないこと、しかしそのためのお膳立てを自分たちがしなければならぬことをよく解っていた。管理人の部屋から時計のベルが鳴って、ブルームフェルトに急げという警告になった。「それじゃ鍵をお取り」とブルームフェルトが言ったが、鍵は彼が手渡すというより彼の手から奪い取られたという感じである。彼が男の子に鍵を渡しておいた方が確実性は比較にならないくらい大きいであろう。「部屋の鍵は下でおばさんから貰いなさい、ボールを取ってきたら鍵はおばさんに戻さないといけないよ。」と付け加えた。「はい、はい」と言って、女の子たちは階段を下りて行った。彼女達は何でも知っている、まったく何でも。まるで男の子の物わりの悪さが伝染したように今はブルームフェルト自身が彼女達がどうしてそんなに素早く自分のした説明からすべてを察知できるのか解らなかった。

さて二人の娘は下でお手伝いのスカートをぐいぐい引っぱっている。しかしブルームフェルトはどれだけ気持ちが引れようが、二人の職務遂行の様子を見ているわけにはいかない。ただ単にもう時間がないというだけでなく、ボールが外に出てくる時に居合わせたくないからである。それどころか女の子達が上の彼の部屋のドアをそろそろ開けようとする時には幾つか小径を隔てたところにいたかった。ボールについて何が予想されるか彼には

まったく解らなかった！ そんな状態で外に出るのはこの朝２度目であった。お手伝いが文字通り娘達に逆らっている様子と、男の子が母親に助けを求めている様子が彼の目に入ってきた。何故このお手伝いのような人間がこの世に生を受け、子孫を残して行くのか理解できなかった。

ブルームフェルトが雇われている下着工場への道すがら他のことより仕事のことが徐々に頭の中を占めてきた。歩くスピードを上げた。男の子の所為で出るのが遅れたにも拘らず、会社に着いたのはいちばんであった。この事務所はガラスで仕切られた小さな空間で、ブルームフェルトのための書き物机と部下の見習いのための立ち机が二つ置いてあった。この立ち机はまるで小学生のためといわんばかりに小さくて狭いにも拘らず、事務所の中はとても狭くて見習いは腰掛けることができない。そうするとブルームフェルトの肘掛け椅子の場所がなくなるからである。したがって見習いは一日中立ち机のそばで沈んだ気分で立っている。彼らにとっては不快極まりない。そのことでブルームフェルトもまた彼らを観察することで気が重くなる。しばしば彼らは立ち机に押し駆けてくるのだが、それは仕事をするというよりは互いに囁き合い、否それどころか居眠りするためである。ブルームフェルトは彼らに対して腹の立つことが沢山あった。彼らは、ブルームフェルトが課せられている途轍もない仕事を支えるのにまったく覚束なかった。この仕事の中身は商品全体及び金銭の出し入れであり、在宅勤務の女性と一緒に当たっており、この女性達は会社からある種上質な商品の生産を任されている。この仕事の大きさを判断するには肥えた目で全体の状況をより見抜く力が必要である。しかしこの見る目はブルームフェルトの直接の上司が数年前に死んでから最早誰も持っていない。それ故ブルームフェルトもまた自分の仕事について判断できる人はいないと思っている。例えば工場主のオットマー氏は明らかにブルームフェルトの仕事を過小に評価している、勿論この20年間ブルームフェルトが果たしてきた功績を認めているが、それはただ単にそうしなければならないというだけではなく、彼を忠実で信頼できる人間と見ているからである。それでも彼の仕事を過小評価しているのは、いわばその仕事はブルームフェルトがやっているより簡単に出来、それ故どの点から見てももっと条件のいい設備が整備されているからである。ただこうした理由でオットマー氏がブルームフェルトの仕事場に減多に姿を現さないというのは、皆が言っているようにそれは信ずるに足りない。それはブルームフェルトのやり方を見て催す怒りを抱えなくて済むように。そんな風に間違った評価をされることは確かにブルームフェルトにとって悲しむべきことであるが、取り除くことはできない。というのも一ヶ月の間ずっとオットマー氏にブルームフェルトの仕事場に居

続けるように、またここで為されている多くの種類の仕事を勉強してもらい、彼自身が言うところのより良い方法を実践してもらい、このことの必然的な結果としてブルームフェルトの部署が潰れる、そうしたことでブルームフェルトのことを納得してもらうようなことをオットマー氏に強要することはできない。それ故ブルームフェルトはこれまでのように迷うことなく自分の仕事を遂行し、暫く経ってから仮にオットマー氏が姿を現してもほんの少し驚くだけで部下としての義務感から設備のあれこれを控えめに説明しようとする。その後オットマー氏は黙って頷きながら目を伏せて出て行く、いつか彼がそのポストを退かねばならなくなり、その結果として誰にも解決できないような大きな混乱をもたらすという考えのほうが、上司に認められていないことよりも彼の心を痛めることが多かった。何故ならブルームフェルトは自分の代わりをし、ひどい停滞を避けるような形でポストを引き継いでくれる人間が工場内にはいないということをよく知っているからである。上司が誰かを過小評価すると、当然従業員達はできればその点で上司を超えようとする。誰もがブルームフェルトの仕事を過小評価する、自分を磨くためにある期間ブルームフェルトの部署で仕事をする必要とは思わない、新しい従業員が雇われてもブルームフェルトのところに自分からすすんで配属される者はいない。その結果ブルームフェルトの部署では後継者が育たない。これまで部下に支えられて只ひとりですべてを切り盛りしてきたブルームフェルトが見習いを附けてほしいと要求した時、極めて深刻な摩擦が生じた。殆ど毎日ブルームフェルトはオットマー氏の執務室に顔を見せ、何故自分の部署に見習いが必要かを説明した。自分が楽をしたいから見習いを要求するのではない。楽をしたいとは思わない、自分に与えられた仕事は十分やっているし、そうした生き方を止めようとは思わないが、しかしオットマー氏に考えていただきたい、この間事業は拡大されてきて、それに応じて全ての部署が大きくなってきたが、ただブルームフェルトのところだけがいつも忘れられている。正に自分のところの仕事がどれほど膨らんでしまったことか！ その時期のことをオットマー氏は確かに覚えていないが、ブルームフェルトがその部署に入ったとき約10人の縫子しかいなかった。今ではその数50から60の間を上下している。そうした仕事には労働力が必要であり、自分がその仕事のために身を粉にすることは保証するが、完全にこなせるかとなると今からは保証できない。さてオットマー氏がブルームフェルトの申請を拒んだことはない。そんなことを古くからの職員に対してできない。しかし殆ど話を聞かず、願い出ているブルームフェルトを飛び越えて他の人間と話しながら、半分頷きつつ2、3日したら忘れてしまう——このようなやり方は本当に人の心を傷つけている。元来このことはブルームフェルトのためではな

い。彼は決して空想家ではない。どれほど他人からの尊敬や承認が素晴らしкаろうと、ブルームフェルトはそんなものではなくてもよかった。にも拘らずそんな風である限り自分のポジションに拘った。何れにしても彼の言っていることは正しく、この正しさはどれほど時間がかかろうと最後には認めてもらわなければならない。又事実ブルームフェルトは二人の見習いを貰ったのである。勿論どんな見習いであろうと。人は思ったかも知れない、オットマー氏が事情を見抜いていて、見習いを拒むよりは見習いをあてがうことでよりはっきりとブルームフェルトの部署に対する軽蔑の態度を示すことができた。それどころかあり得ることではあるが、オットマー氏は探してはみたものの、理解できることではあるが、長いこと見つけることができなかったことを理由にしてブルームフェルトを宥めたということである。今はブルームフェルトは文句を言えない、答えは予め用意されており、自分はひとりしか求めていなかったのに二人あてがって貰った。それほど巧みにオットマー氏がお膳立てしていたのである。当然ブルームフェルトは文句を言った、しかし文字通り彼の苦境がそうさせたのであり、彼がさらに人を附けてくれと求めたからではない。彼はそれほど強く文句を言った訳ではなく、適切な機会についてに言っただけである。にも拘らず悪意のある同僚の間では噂が広まり、誰かがオットマー氏に尋ねた、今回特別に人を附けてもらったのにそれでも文句を言っているのかと。それに対してオットマー氏が当然のごとく答えている、ブルームフェルトは相変わらず文句を言っており、しかしそれでいいと。彼、オットマー氏はことを見抜いて、縫子ひとりと見習いひとりを、つまり全部で約60人にしてやろうと言っている。しかしそれでも満足しなかったらもっと多くの人間を送り込んでやる、それによってあの気狂い部屋が完璧なものになるまで止めない、ブルームフェルトの部署ではこの気狂い度が何年か前から増しているのだと。勿論、今やこの件について話すときはオットマー氏の言い方が真似られている。当のオットマー氏は、この点はブルームフェルトは疑わないのだが、そんな口調でブルームフェルトについて話すことは当時なかった。全て2階の事務所にいる怠け者達の「捏造」であった。ブルームフェルトが見習いの存在を無視できていたら、そんな捏造は意に介さずに済んだであろう。しかし見習い達がそこにいたのだから、最早放り出す訳にはいかなかった。青白くて弱々しい子どもたち。彼らの記録によれば、既に学校へは行かなくていい年齢であるはずなのに、実際にはそれが信じられないくらいである。そう、彼らを一度ならずも教師に任せなかったであろう、それくらいまだ奴らは母親の手の中にあった。まだ分別を持って行動できなかったし、長いこと立っていると、特に最初のうちはことのほか疲れていた。目を離すと彼らは身体が弱くてすぐに姿勢が悪くな

り、体が傾いで隅の方でかがみ込んでしまう。ブルームフェルトは彼らに解らせようとする、いつも快適さに身を任せていると一生不具者になっていまいぞと。見習い達に一寸した仕事の処理を敢えて頼むと、ひとりがほんの2、3歩進めればいいものを、慌てて走りすぎて立ち机で膝を打って怪我をした。部屋には縫子がいっぱいいて、立ち机には商品がいっぱい置いてある、しかしブルームフェルトはそれら全てを等閑に付して、泣いている見習いを事務所につれていき、ちょっとした絆創膏を張ってやらねばならなかった。しかし見習い達のやる気も単なる見せかけで、現実には時々子供のように目立ちたがっただけである。それよりも度々あったことは、もしくは殆ど何時もと言っているが、彼らは上役の注意深さを欺こう、騙そうとすることである。ある時、大事な仕事の折りに汗を拭き拭きかれらの傍らを通り過ぎると、彼らが商品であるボールの間に隠れて切手の交換をしていることに気付いた。できたら拳骨を彼らの頭に食らわせたいところであったが、それが彼らの行ないに対する唯一のお仕置きであったのだが、しかし子供のだからブルームフェルトは殴り倒す訳にはいかなかった。それによって彼は見習いのことでさらに心を痛めることになった。もともと見習いが直接的に自分を支援するのだとばかりブルームフェルトは思い込んでいた。その助力には商品を仕分するときには多くの骨折りと注意深さが求められた。彼は考えていた、真ん中の立ち机の後ろに立ち、いつもすべてのものを監視し、書き留めておく。その一方で見習いは見習いで彼の命令に沿ってあっちこち走り回り、全てを分けて行くのである。彼はイメージしてみた、彼のどれだけ鋭い注意力もそのような混乱の中では十分ではないことを。見習いが注意を払うことで補われる。見習いが徐々に経験を積んでいちいち細々と指図を受けることなく遂には自分で、商品需要や信用性に関わることであるが、縫子達を互いに区別することを学んでいくであろうと。見習いという点で測ってみればまったく希望のないことではあるが、ブルームフェルトは見抜いていた、そもそも彼らに縫子と話させてはならない。彼等は何人かの縫子のところへは始めから行かなかった。何故なら縫子達に反感と不安を抱えていたからである。それに反して好意を持っている縫子に対してはしばしば自分の方からドアのところまで走って行くのであった。気に入っている者には欲しがっているものを持って行き、たとえ縫子が受け取るに相応しかろうと、こそこそと彼らの手の中にそれらを押し込み、これらの優遇されている者のために空いている棚の上にいろいろな切れ端や値打ちのなくなった残り物、まだ使える一寸したものを集め、ブルームフェルトの背後で幸せそうに遠くから目配せをし、それと引き換えにボンボンを口の中に入れてもらっている。ブルームフェルトは勿論とんでもない奴らに対してはすぐにケリを付け、縫子がくる

時には仕切りの中に追い払っておいた。しかしなお長らく彼らはこのことをとんでもない不正と思い、反抗し勇敢にもペンを壊し、勿論頭を上げることなく、時々大きな音を立てて窓ガラスを叩いた。ブルームフェルトから受けねばならなかった、彼等の考えからすればひどい仕打ちを縫子達に気付いてもらうために。

しかしこの自分達がおかしている不正については彼等はまったく理解していない。例えば殆ど毎日事務所へは遅れてくる。上司のブルームフェルトはずっと若い時から少なくとも始業時間の30分前には会社に入るのを当然と思ってきた。それは努めてそうしていたのではなく、誇張した義務感からでもなく、マナーがそうさせていたのである。そんなブルームフェルトが大抵1時間以上も見習い達を待たねばならない。朝食のゼンメルを頬張りながら、通常彼はホールの立ち机の後ろに立って縫子達の小さな帳簿で計算の締めをやっている。すぐに彼は仕事に没頭し他のことが考えられなくなる。そんな時突然びくっとして、その後暫く彼の手の中でペンが震えている。そこにひとりの見習いが急いで入ってきて、今にも倒れんばかりの様子で一方の手でどこかをしっかり掴み、もう一方の手できつそうな息をして、胸を押さえている。——しかし全体が意味しているのは自分が遅れたことに対して弁解しているのであり、その弁解が余りにも可笑しいのでブルームフェルトは意図的にそれを聞いていない。何故なら彼がそうしなかったら、それに相応しいやり方で若者を鞭打たねばならないであろうから。しかし彼はほんのすこしその若者を見て、手を広げ仕切りの方を指差し再び自分の仕事に向かう。しかし次のようなことを期待しても良いのである。見習いが上司の好意を見て取って自分の持ち場に急ぐ。否、彼は急いでいるのではない、彼はスキップを踏みながらつま先歩きをし矢継ぎ早に足を前に出して行く。奴は上司を笑い者にしたいのか？ そうでもない、またしても恐れと自己満足の入り交じった状態になり、それに対しては抗いようがない。一体それ以外にどう説明すれば良いのか。今日は彼自身何時になく遅れて事務所に来、長いこと待った後——帳簿のチェックをする気はなく——分別のない小使いが彼の前で箒で空中に飛ばした塵の雲を通して小径にいる二人の見習いを眺める。彼等は呑気にこっちへ向かっている。彼等はしっかりと互いに抱き合い大事なことを話しているように見える。しかし、それはきっと仕事中には許されないような事柄である。彼等はガラスドアに近づいてくるにつれ歩みを遅くしている。やっとその内のひとりがドアの取っ手に手をかけるが、取っ手を下に下ろさず、相変わらず話をし相手に耳を傾け合って笑っている。「我らが旦那様にドアを開けなさい」とブルームフェルトは手を上げて小使いに向かって叫んだ。しかし見習い達が入ってきた時、ブルームフェルトは最早ガミガミ言わず、彼等の挨拶にも返事をせず

自分の書き物机に向かった。彼は計算を始め、しかし時々見習いが何をしているのかを見るために視線を上げる。ひとりはとても疲れているようで、欠伸をし、目をこすっている。その見習いがオーバーコートをフックに掛けた時、その機会を利用して少しばかり壁に凭れ掛かっている。小径では元気だったのに、しかし仕事が近づくにつれ疲れが出てきたのだ。もうひとりの見習いはそれに比べて仕事をする気がある。それでも限られた仕事に対してであるが。以前から彼の望みは掃除をすることであった。しかしそれは彼に相応しい仕事ではない。掃除は小使いにぴったりの仕事なのである。見習いが掃除をすること自体にブルームフェルトは反対ではない。見習いに掃除をさせれば良い、小使いより下手糞に掃除が出来るやつなんていない。しかし見習いが掃除をしたいのなら、小使いが掃除を始めるずっと前に来ていないといけないし、そのためにはもっぱら彼に義務づけられた事務所の仕事の時間を浪費すべきではない。しかしこの若い男が分別ある考えができないのであれば、少なくとも小使い、つまり工場主がブルームフェルトの部署以外だったら我慢しないであろうこの半分目の見えない年寄り、神と工場主のお慈悲で生きている年よりは少なくとも譲歩するかも知れず、つかの間箒を若いのに譲るかも知れない、しかしこの若者は不器用で、すぐに掃除する気をなくし、箒を持って再び小使いに掃除させようと、追っかけ回すかも知れない。しかし小使いは掃除のことに特に責任を感じているようで若い男が自分の方に近づいてくるや否や震える手でもっと上手く箒を握もうとする様子が目に入ってくる。それよりはむしろ静かに立ったまま皆の注意を箒の行き先に向けるために掃除を放ったらかしにしている。見習いは言葉でお願いすることはない。というのも一見帳簿をつけているように見えるブルームフェルトを畏れていたからである。普通の言葉だったら役には立たない。何故なら小使いには叫ぶような声でないと耳に届かないからである。而して見習いはまずは小使いの袖を掴む。当然小使いは何のことだか解っている。暗い表情で見習いを見つめ、頭を振って箒を胸の近くへ引き寄せる。今度は見習いが手を組み合わせてお願いする。勿論お願いすることで何かが得られるという希望を持っている訳ではない。お願いすることが楽しくてやっているのである。もうひとりの見習いは軽く笑みを浮かべて事態を見守っており、たとえ理解に苦しむような形であってもブルームフェルトが自分の言うことを聞いていないと思っている。小使いにはこの願いはこれっぽっちも心に届いておらず、彼は再び身体の向きを変え、また安心して箒を使うことができていると思っている。しかしその見習いはつま先でピョンピョン飛び跳ねながら、懇願するように手をこすり合わせて小使いの後を附いて廻る、こんどはこちらからお願いする。小使いがまた向きを変えると、見習いもピョンピョン飛びで附いて

行く光景が何度か繰り返される。最後には小使いは四方八方から封鎖されたように感じ、自分の方が見習いより早く疲れていることに気付いた、このことはもう少し単純でいたらすぐに気付くことができていたであろうが。その結果小使いは他に助けを求め、もしそれを止めないのなら苦情を言いつけるであろうブルームフェルトを指差しながら見習いを脅す。そもそも箒を手に入れたいのならば、もっと急がなければならないことを見習いは今やっと認識した。それで厚かましくも箒の方に手を伸ばした。もうひとりの見習いが思わず上げた叫び声があるべき顛末を暗示していた。確かに小使いは今回は一歩身を引いて箒を後ろに引けば取られずに済む。しかし最早見習いも負けてはいなかった。口を開けて目を輝かせて飛びかかってきた。小使いは大急ぎで逃げようとする。しかし彼の年老いた脚は前に出ず、ガタガタ震えるばかりで、見習いは箒をひったくる。例えば箒を掴むことができなくとも自分のものにできたのは、箒が小使いの手から落ちてしまったからである。勿論一見すると箒は見習いにとっても失したことになる、というのも箒が落ちた時、二人の見習いと小使いはまずは目を見合った。何故なら今やすべてがブルームフェルトにバレてしまったか

らである。実際のところブルームフェルトは、今初めて気が付いたかのように、覗き窓から目を上げ、厳しく探るように3人をじっと見た、床の上の箒も目に留らぬはずはなかった。沈黙が長く続こうが、咎ある見習いが掃除をしたいという欲求を抑えることが出来なからうが、

何れにしても見習いは身をかがめて、勿論箒ではなく動物に手を出すように慎重に箒を手に取り、その箒で床の上を擦る。しかしブルームフェルトが飛び上がって仕切りから出て行くと、すぐにびっくりしたように箒を投げ捨てる。「二人とも仕事に就け、これ以上文句を言うな」と叫んでブルームフェルトは広げた手で二人の見習いに自分たちの立ち机に行くように指示した。すぐに二人は従う、しかし頭を下げて照れるのではなく、むしろ体を捻って身を強張らせてブルームフェルトのそばを通り過ぎ、まるでブルームフェルトが殴りかかってくるのを防ぐかのようにじっと彼の目を凝視する。だがブルームフェルトが殴ることはないことを経験上十分学んできた可能性はある。しかし彼等は過度に不安がり、思いやりなど微塵もなく絶えず自分達の権利を守ろうとする、それは実際上の権利なのかそれとも見せかけの権利なのか。